

視点(1843)

(思考と研究の概念編)

I Saw All America (その259) !!

— アメリカの銃社会と文化論 —

アメリカのバスプロショップス（アウトドアに特化したスポーツメガストア＝アウトドアの分野ではないものはないMDing＝スペシャリティ百貨店）の売場に「銃（猟銃と拳銃）」が豊富に売られており、日本人としては違和感があります。

アメリカでも何度か銃規制の法律を出そうとしたものの、議会のみならずアメリカ国民の反対にあい、いまだに銃規制は行われていません。銃は百害あって一利なしのように我々日本人は思いますが、アメリカには「銃はアメリカ人の文化」であるという考え方があり、またこの考え方が浸透しています。

この「銃はアメリカの文化」であるとの考え方は、次のようなアメリカの歴史に起因しています。

アメリカは、コロンブスによって発見されて以来、ヨーロッパ人の植民地であり開拓地でありました。開拓地であるため、もともと住んでいたネイティブアメリカンとの闘いや、治安が安定していない中での自己防衛のために銃は欠くことのできない生活必需品でした。また、農作物を野生動物（アメリカンバイソン、狼、熊など）から守るためにも銃は必要でした。このように、銃はアメリカで生きていくための絶対条件である状態が何百年（およそ300年）続きました。しかし、現在は銃の必要性は歴史上の生活必需品としての存在は希薄化し、今や銃の持つ危険性のほうが社会全体にとって多くなりました。

ところが、銃はアメリカの文化であるとの考え方が優先し、今では平均1人1丁（約3億丁）の銃がアメリカに存在すると言われるまでになりました。実は、アメリカの銃社会は銃の必要性という観点からだけでは解決できない状態になっています。

すなわち、**何ごとにも300年の歴史を持つ「文化」となります。**50年前のものは「古いという概念」、100年前のものは「ノスタルジー（懐かしい）という概念」、300年持続すると「文化という概念」となります（六車流：流通・マーケティング理論）。

「文化」までになると必然性は関係なく、伝統性ならびに歴史性となります。アメリカの銃社会は、まさに300年を経てアメリカ人の文化になっているために、単に銃は危険だとか持つ必要性がないといった概念では解決できなくなっています。

そこで、比喩論で日本の武士社会の刀について論じさせていただきます。武士はそもそも平安時代に貴族の荘園の番人として生まれ、番人としての武器は刀でした。やがて、武士は貴族の荘園を自分のものとし、封建社会をつくり、互いに領土の奪い合いをするようになり、刀は武士にとって必然性の高いものとなりました。しかし、徳川時代となり300年間の国内戦争のない平和国家となった江戸時代において、武士は本来の目的である刀（武器）は必要なくなりましたが、平安時代の後半、鎌倉時代、室町時代、戦国時代と500～600年間の間、武士にとって刀は必需品であったため、江戸時代になって武器としての刀は必要なくても、武士は刀を捨てず、むしろ権力の象徴として刀と持つことは社会の中に溶け込み、文化となりました。そして、やっと刀を廃止したのは明治維新という革命が起こってからで、権力で武士を倒し、刀文化を廃止させました。

このように、アメリカの銃社会も日本の刀社会（江戸時代）も、300年以上の歴史の中で蓄積されたものであり、必然性がなくなったからといって簡単にはなりません。日本は刀文化を終わらせ、日本刀は現在、文化の分野のみ骨董価値で存在していますが、アメリカはまだ銃が社会生活の中に存在しています。問題です。

(株)ダイナミックマーケティング社^{＋6}

代表 六車 秀之